

どうなる日本？  
政党の変遷と国政の歴史を振り返る

<1> 55年体制（保守合同と革新合同）

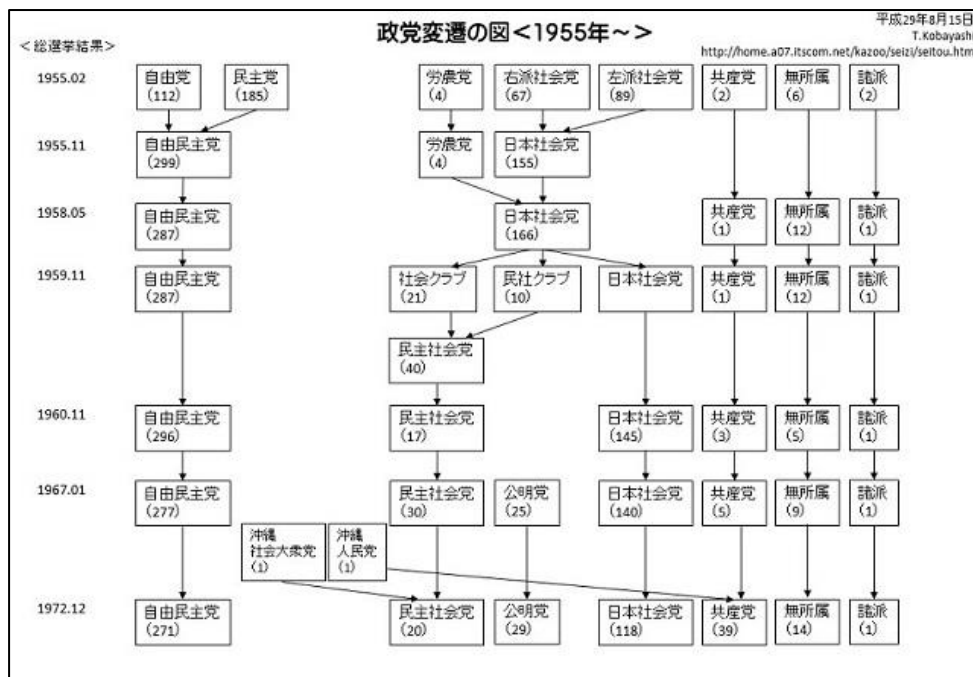
1955年に自由党と民主党が合流する「保守合同」が行われて、自由民主党（以下「自民党」と略記）が出来た。かたや野党側では右派社会党・左派社会党・労農党が合流して、日本社会党（以下「社会党」と略記）が誕生したのも同じような時期だった。

衆議院の議席で見ると、自民党が300弱、社会党が160程度というシェアになっていた。

自由党と民主党の間にはイデオロギー的にはあまり大きな開きはないように見えたが、社会党の中での右派と左派の違いは僅かなものではなく、危険な賭けだった。

<2> 社会党分裂

1959年、社会党に大きな転機が来た。安保闘争に関する運動方針を巡る対立が原因とされているが、右派を中心としたメンバーが脱藩して社会クラブ・民社クラブという会派を興した。そしてそれが引き金



となり民主社会党（1969年民社党と改称）が誕生した。

1967年、創価学会が政治活動に参入し公明党を興したことで、自民党（衆議院議席277）・社会党（140）・民社党（30）・公明党（25）・共産党（5）という勢力図になった。

<3> 新自由クラブ誕生

ロッキード事件などで「政治と金」を中心とした問題が表面化してきた。1976年に自民党の中から抜け出した河野洋平・西岡武夫らが「保守政治の刷新」の旗を掲げて新自由クラブを結成した。

結成後最初の衆議院選挙では17名が当選して、「次の時代を担うか？」と話題になったが、「中道政党」として歩むことを目指す河野らと「非自民の第二保守党」を目指す西岡らとの対立が表面化して崩壊が始まった。

「公党としての立ち位置」が定まらぬままの軟弱集団は、結党から10年で消滅して一部議員は元の自民党に戻った。もっとも、「中道政党」と「非自民第二保守党」との違いなど我々俗人には理解のしようもない。

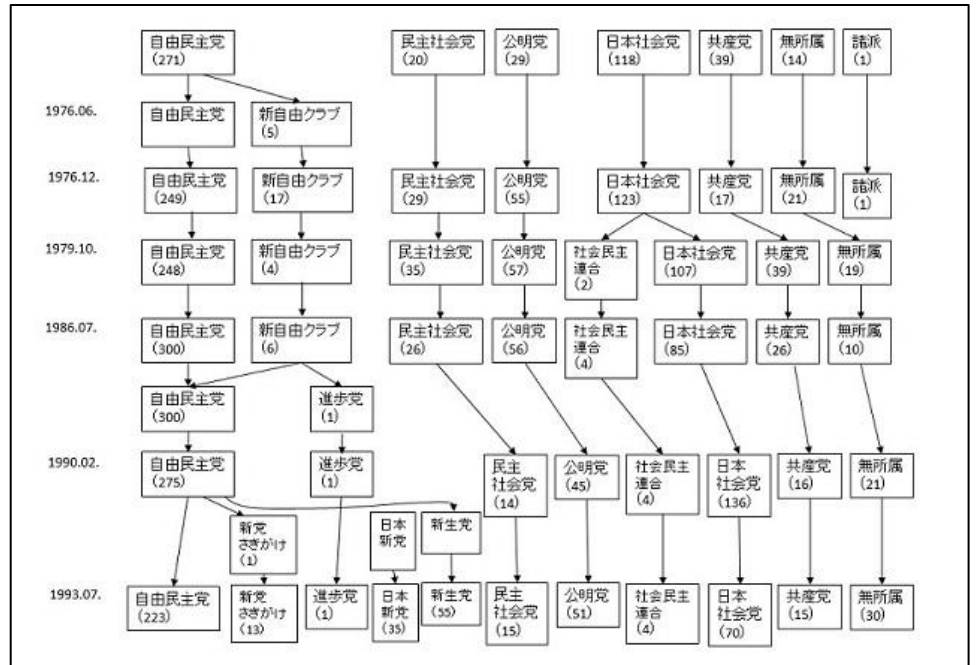
<4> 自民党の危機と連立政権

1990年代に入ると自民党から抜け出して新しい党を興す動きが顕著になり始めた。羽田・原口を中心とした新生党、鳩山・武村・玄葉を中心とした新党さきがけ等がその始まりで、前熊本県知事の細川が興した日本新党とともに新たな火種の元となったが、所詮自民党の分身であることに変わりはない。

一方、野党側では民社党と社会党のやせ細りが目立ってきた。

バブル崩壊の上に、リクルート未公開株譲渡事件・佐川急便事件と暴力団との政府要人とのつながり・金丸信の巨額脱税・ゼネコン闇献金などなど政治資金を巡る腐敗事件が明るみに出て、自民党政府への国民の不信感は頂点に達した。1993年の衆議院選挙では自民党が単独で過半数の議席を押さえることが出来ず、結果として新生党・新党さきがけ・日本新党が手を組んで連立政権（細川内閣）を作り上げた。

1994年には、ここに自民党・共産党を除く党が加わって羽田内閣ができたが、わずか二ヶ月余で社会党の離脱により崩壊。自民党は政権奪還の切り札として社会党との連立という手段に出た。そして誕生したのが村山内閣。しかし、この内閣も約1年半で突然の辞意表明で幕を下ろすことになった。村山首相自身は国政を背負う責任ある立場をこなそうと努力はしたのかもしれないが、出身母体である社会党の幹部との間のトラブルが原因とされている。元より主要な政策において考え方に大きな開きがある二つの政党が連立しても上手く行くはずがないことは多くの人々が予想していたことだった。別な見方をすれば、自民党に利用されただけなのかもしれない。



このような変化の底流にあった 1993 年から 1996 年にかけての政党再編の動きは複雑多岐にわたった。そして前述の自民党の分派と崩壊した民社党の一部との合体が始まり、ここに社会党からも多少加わって民主党が誕生した。

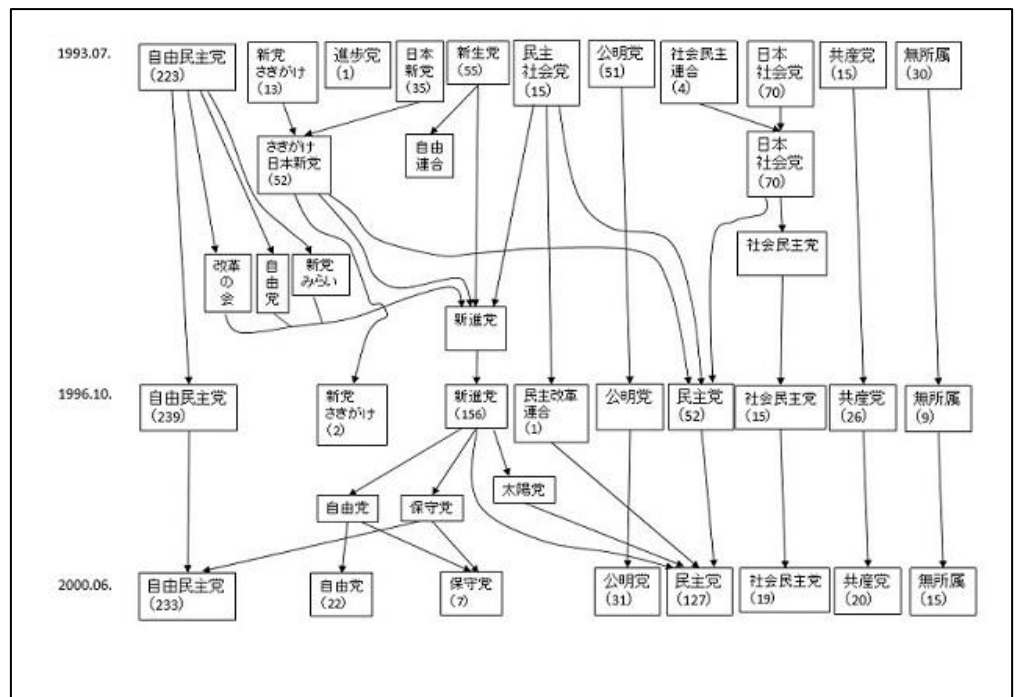
1996 年には、自民党・新進党・公明党・民主党に社会民主党（日本社会党から改称）・共産党が続く構図となり、社会民主党（以下「社民党」と略記）の衰退と共産党の躍進が顕著になってきたのも注目に値する。

1996 年には、自民党・新進党・公明党・民主党に社会民主党（日本社会党から改称）・共産党が続く構図となり、社会民主党（以下「社民党」と略記）の衰退と共産党の躍進が顕著になってきたのも注目に値する。

### <5> 自民党の凋落と民主党政権の誕生

再び政権は自民党に戻ってきたが、その後も政党再編の小さな動きが続き、2000 年になって自民党 (233)・

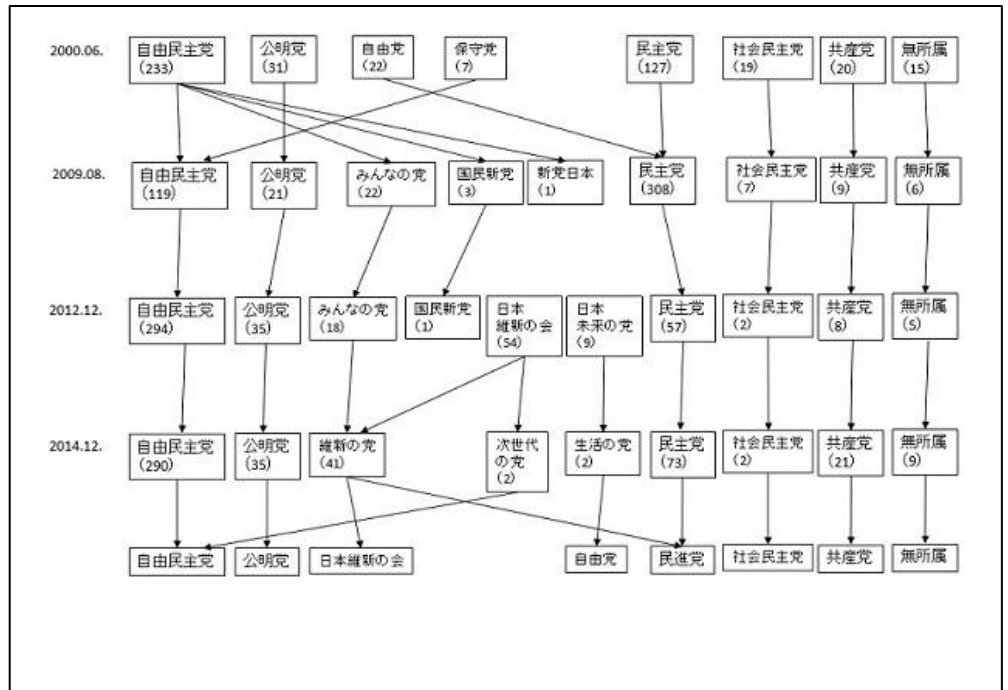
民主党 (127)・公明党 (31)・自由党 (22)・共産党 (20)・社民党 (19) というシェアになった。この時期に目立った動きをしたのは公明党で、1994 年には反自民勢力の連立に加わった筈なのに小渕政権になると自公連立を打ち出し「政権参加」に注力し始めたことである。減量した自民党が生き残りを賭ける起死回生策であると同時に、相手が誰であれ連立政権の中に居たい公明党の思惑との合流ということになった。



2000 年以降の自民党政権は、森喜朗・小泉純一郎と続き郵政民営化が実現したが、安倍晋三・福田康夫・麻生太郎と短命内閣が続いた。この間は「公的な場での失言・誤読」などの低次元の過ちと「突然政権投げ出

し」などの事件が続き、まとまった仕事をしたのは在任期間 5 年半の小泉内閣だけだったかもしれない。

その後もいくつかの離党・合体・解党・合流などの様々な動きが続いた結果、2009 年 8 月の総選挙で自民党が歴史的な敗北を喫する。自民党 (119)・公明党 (21)・民主党 (308)・社民党 (7)・共産党 (9)・みんなの党 (5)・国民新党 (3)・他となり、民主党政権が誕生することになった。国民に向けて「受けを狙った施策」はことごとく国債発行に委ねることになり、日米安保条約の解釈・国土防衛と憲法解釈・沖縄基地問題から環境対策に至るまで思うようにことが運ばない。考え方が異なる集団が選挙目当ての数合わせで離合集散を繰り返してきただけなので、いざ政権を担ったところで政策面で一枚岩になっていないために仕事が前に進む筈がない。このようなことは始める前から分かっていたことなのだが、ムードだけで踊った有権者は安易にこの党を選択してしまった。これは民主党が悪いと言うよりも、投票した一般国民側に大きな責任があると言える。やがて党内の軋み音を響かせながら動く日々が目立って来て・・・そして歴史年表に「失われた 3 年」という言葉までが刻まれる結果となった。



解釈・国土防衛と憲法解釈・沖縄基地問題から環境対策に至るまで思うようにことが運ばない。考え方が異なる集団が選挙目当ての数合わせで離合集散を繰り返してきただけなので、いざ政権を担ったところで政策面で一枚岩になっていないために仕事が前に進む筈がない。このようなことは始める前から分かっていたことなのだが、ムードだけで踊った有権者は安易にこの党を選択してしまった。これは民主党が悪いと言うよりも、投票した一般国民側に大きな責任があると言える。やがて党内の軋み音を響かせながら動く日々が目立って来て・・・そして歴史年表に「失われた 3 年」という言葉までが刻まれる結果となった。

### <6> そして、今 2017 年

さて、再び野党に戻った民主党はその後小さな集団との合体があったり、脱藩があったりを繰り返しつつ民進党と名を変えて今日に至るわけである。

一方では公明党との連立による自民党の一強独走の体制が長く続き、2016 年頃から様々な不具合が目立ち始めてきた。野党第一党である民進党が国民に向けて何かを発信すべき状況の中で、何と「野党勢力を結集して自民党に対抗していく」という作戦を打ち出し、その一環として「民進党・共産党の共闘」という考えが打ち出された。もしこれが功を奏して議席数を逆転できれば「野党連合内閣」が実現するという数合わせのプランのようだ。

当然のことながら党内からの軋み音は小さい筈がない。仮にこれが実現したにせよ、この内閣は三日も持たないことは不勉強な私にも想像できる。

また逆な立場から見ると、どちらが先に言い出したのかは別として、こんなことを考えて同調しようとする共産党も無秩序・無節操な政党に落ちぶれたものだと思う。

### <7> どの政党も問題だらけ

昨今、安倍内閣の支持率が低下し不支持率が向上しているにもかかわらず野党第一党である民進党への期待度も支持率も一向に向上しない。それはこの政党の成り立ちとこれまでの歴史を見れば一目瞭然である。安倍首相は何でも自分で出て行って国民にアピールしようとするので、担当分野の閣僚には出番がない。何も仕事はしなくても良いから名前だけ連ねておけと言わんばかりの内閣で、力のある閣僚はいないのかもしれない。自民党の党内の空気もほぼ似たような状態で、風見鶏が沢山建っているだけで殆どの議員が「次の選挙で自分が生き残れる方策」を考えているに過ぎないとしか大衆の目には写っていない。

自民党であれ民進党であれ、一旦国会議員の肩書きを手に入れると、その肩書きを維持するために必死になるだけで、思想・信条・政策などは二の次なのではないだろうか。すべての議員がそうだとは思いたくないが、「当選するために有権者に見せた顔」と「当選してから見せる顔」とは異なる人が存在することは確かな

ようだ。

公明党は、一般国民の目には「国土交通大臣のポストを守り続けたいだけで連立に参加している」と写っているが、真相や如何に。母体である創価学会が縮退しない限り議席数には大きな変化は発生しないだろう。共産党も社民党も同じように「労働者・農民」という階級を特定の思想でまとめて来た集団だったが、現代社会では「労働者」も「農民」も存在はするが「階級」を構成しているわけではない。階級の名残だった「労働組合」が力を持った集団ではなくなってきたこともあり、数の上での力は持ち得なくなってきた。世界各国で同様の変化が始まり、国を横断した世界的な社会主義・共産主義の連携が途切れたことも背景の一つにある。そして、数少ない「取り残された国」が不埒な行動を続けることで、この世界の政治思想は「正義の敵」のレッテルを貼られることになってしまった。

社民党は、支持団体であったいくつか労働組合組織の崩壊とともに静かに消滅への道を辿り始めた。

一方の共産党は公明党と同じように、堅固な組織と囲い込んだ会員制共同体のような塊で「一定の票数が確保出来る体制」を維持していることで生き延びてきて、社会主義・共産主義崩壊の流れの中で「市民政党」を標榜して行き残りを図っている。ところが一般大衆の「取り残された不埒な国と同じ思想の政党ではないか？」という先入観や疑念を拭うにはかなりの時間が必要な状況にあり、一般国民の支持による党勢拡大への道はけわしそうである。

### <8> 誰が負うべき責任か

このような環境の中で、国家が抱える重要課題は山積しており、進路を誤れば崩壊の危機すらある。国政が安定して国策が正しく進められることが大事な状況にある。

選挙の度に風の流れにまかせて行方が定まらなかつたり、目先の利得に目がくらんで進路を誤ったりする有権者である「一般国民」に大きな責任がある。国政を担う国会議員を選ぶ「一般国民」がもっと勉強すべきなのかもしれない。

以上

\*註：歴史の流れ・政党変遷の図などの表記において、省略箇所が多数あります。ご容赦下さい。

#### <参考資料①> 民進党内のグループと出身母体（派閥？）

鳩山グループ＝旧民主党右派（日本新党・新党さきがけから合流）・新進党

菅グループ＝旧民主党左派（日本新党・新党さきがけ・社民党から合流）・民主改革連合

旧社会党グループ＝旧民主党左派（社会党・社民党から合流）・旧総評系労組を基盤とする組織

旧民社党系グループ＝民社党・新進党・新党友愛・旧同盟系労組を基盤とする組織

旧羽田孜グループ＝新生党・新進党・民政党

前原グループ＝松下政経塾出身者・旧民主党（日本新党・新党さきがけから合流）

野田グループ＝松下政経塾出身者・新進党・日本新党

近藤グループ＝旧民主党左派（新党さきがけ・社民党から合流）・護憲派若手

#### <参考資料②> 民進党の主要党役員（要職に複数人を連ねざるをえない事情は？）

最高顧問＝横路孝弘・菅直人

常任顧問＝岡田克也

代表＝蓮舫・・・辞任表明（平成 29 年 7 月）

代表代行＝安住敦・江田憲司

副代表＝近藤昭一・長浜博行・神本美恵子

幹事長＝野田佳彦・・・辞任表明（平成 29 年 7 月）

幹事長代理＝玉木雄一郎・福山哲郎・芝博一

副幹事長＝津村啓介・西村智奈美・太田和美・水戸将史・小熊慎司・松田直久・

大野元裕・石橋通宏

（これ以下の役職の表記は省略）